

# 他者と相違する自己の諸特徴の受容の発達に 関する日中比較研究

渡 辺 弘 純

(教育心理学研究室)

武 勤

(中国・山東省教育委員会)

濱 田 直 美

(瀬戸町立大久小学校)

デーヴィッド クリスタル

(米国・ジョージタウン大学)

(平成12年6月1日受理)

## The acceptance of the characteristics of the self who differs from others in Japanese and Chinese children and adolescents — Developmental and cross-cultural analysis —

Hirozumi WATANABE, Chin WU, Naomi HAMADA, & David S. CRYSTAL

### 問 題

民族や人種間、あるいは宗教間の紛争が続発している今日、人間の異質性の受容は、解決の迫られている世界的課題である。個人のレベルに眼を転じて、いじめや不登校の問題に限らず、人と人が関係し合う場面において、人間の異質性とどのように関わり合うかは、多くの人々、とりわけ自己形成途上の子どもたちにとって、切実な関心事となっている。

一般には全く別の事柄であると見られる現象も、この問題との関連から説明することも可能である。たとえば、今年、わが国における携帯電話とPHSの加入数は、五千万台を超え、一定の場所に設置されている電話よりも多くなったのであるが、高校生や大学生の携帯電話とPHS利用の激増は、人間の異質性への対応に苦慮し、それとの折り合いをつける一つの姿であると考えられる。その所持を利便性から説明できるのはいうまでもないが、必ずしも強固ではない、自分とは異なる他者との関わりを、絶えず連絡を取ることによって維持しようとしている一面があると解することもできるのである。

人間の異質性の受容には、二つの面がある。すなわち、一つは、自己と異なる諸特徴を持つ

他者の受容であり、もう一つは、他者とは異なる諸特徴を持つ自己の受容である。人間の異質性の受容というとき、通常は、前者が想起される。われわれも、自己と異なる諸特徴を持つ他者の受容に関する一連の研究を報告してきた(渡辺, 1994 : Crystal, Watanabe, & Wu, 1997 : Crystal, Watanabe, Weinfurt, & Wu, 1998 : Crystal, Watanabe, & Chen, 1999 : Watanabe, Crystal, & Killen, 2000)。そして、この問題への関心が非常に高いにもかかわらず、比較文化的研究が非常に少なく、その発達の検討にいたっては全くないといってもよい現状にあることを知ったのである。

人間の異質性の受容のもう一つの面、すなわち他者とは異なる諸特徴を持つ自己の受容については、どうであろうか。ロジャーズの自己受容の概念が、最もよく知られている(Rogers, 1951 : Rogers, 1959)。周知のように、彼は、自己の否定的な体験にも心を開き、ありのまま受け入れることが精神的健康へとつながると考える。この流れを汲んだ研究は、多数報告されており、通常、自己の「確立」した青年期以後の大人を対象に検討されることが多い。本研究で取り扱われるのは、全体としての自己ではなく、全体としての自己と密接な関連を持っているが、それよりはるかに具体的な自己の諸特徴の受容である。他者の諸特徴に気づいたり、自己の諸特徴に気づくこと、そして、具体的な他者の諸特徴と自己の諸特徴を比較することは、青年期以前の子どもたちにも可能であることが報告されている(Suls, & Mullen, 1982)。

エリクソンの心理—社会的危機による発達段階区分における乳幼児期の信頼対不信も、われわれの他者と異なる自己の諸特徴の受容と関連している。そこでは、信頼が問題にされるのであるが、信頼は、必要物を継続的に与えてくれる他者(養育者)への信頼の感覚と同時に、自己の諸器官の能力や他者(養育者)からの愛情を受けるに足る存在としての自己への信頼の感覚の両者を含んでいる(鑑, 1990 : 宮下, 1999)。そこでは、すでに乳幼児期から「自己受容」が問題にされていると読み取ることも可能なのである。

しかしながら、ロジャーズやエリクソンの研究の流れの存在があるものの、他者と異なる自己の諸特徴の受容という側面についても、具体的に、発達の視点から比較文化的に検討した研究は、われわれの知る限りにおいて、全く見当たらないのである。

この研究においては、全体としての自己の受容を取り扱うわけではない。個々の他者と異なる自己の諸特徴の受容について、質問紙レベルにおいて取り扱う。どのような内容を他者と異なる諸特徴としたかについては、昨年、われわれが、日本の小学生と中学生を対象にして、自由記述によって調査した資料(濱田と渡辺, 1999)にもとづいている。

ここでの主たる研究関心は、日本における自己形成過程の一つの側面としての他者と異なる自己の諸特徴の受容であり、中国の資料との比較も、専らこの点の解明のために行われた。また、既に述べたように、この面での基本的資料が不十分である現状を踏まえて、日本と中国の小学生・中学生・高校生を対象として、今後の研究展開に必要な発達の資料を得ることを目的とした。

## 方 法

### 1. 調査への参加者

日本の資料については、小学校4学年児童150名(男子91名, 女子59名), 中学校1学年生徒126名(男子65名, 女子61名), 及び高校1学年生徒237名(男子110名, 女子127名), 計513名

(男子266名, 女子247名)を, 中国の資料については, 小学校4 学年児童81名(男子40名, 女子41名), 中学校1 学年生徒80名(男子40名, 女子40名), 及び高校1 学年生徒80名(男子40名, 女子40名), 計241名(男子120名, 女子121名)を, それぞれ調査対象とした。

## 2. 調査時期及び調査場所

日本の資料については, 小・中学生に関して1997年に, 高校生に関しては1998年に収集された。中国の資料については, すべて1999年に収集された。

いずれの国においても, 調査対象児童生徒の在籍している学校の教室において, 授業担当の教師によって, 集団的調査として実施された。

## 3. 調査内容の構成

調査用紙は, 他者と異なる自己の諸特徴の認知と受容に関わる内容(資料1 参照)と付加的に調査された公的自己意識及び学校生活の楽しさの認知(資料2 参照)から構成されていた。

他者と異なる自己の諸特徴としては, 従来の研究(濱田と渡辺, 1999)から, 能力(知的能力=以下「勉強」と略す, 及び運動能力=以下「運動」と略す), 性格(=「性格」), 及び身体的特徴(=以下「体」と略す)が取り上げられた。まず, それぞれの特徴について, 「好きなこと」と「嫌いなこと」を思い浮かべることが求められた。その上で, これらの特徴が, (1)「同じ学年の多くの友だちと, どのくらい違っていると思うか」(「相違の認知」), (2)「この点をどのくらい変えたいと思うか」(「変身願望」=「受容の困難さ」)について問われ, 5 件法による回答が求められた。すなわち, 4 (「勉強」と「運動」と「性格」と「体」) × 2 (「好きなこと」と「嫌いなこと」) × 2 (「相違の認知」と「変身願望」=「受容の困難さ」) の16の回答が求められた。

公的自己意識については, 通常自己意識尺度(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)から, 公的自己意識の項目のみ7 項目が取り出された。その日本語訳が, 調査項目として採用され, 5 件法による回答が求められた。また, 学校生活の楽しさについては, 古市(1997)の「学校生活享受感情測定尺度」を構成する10 項目から5 項目が選択され, 調査項目とされた。ここでも, 5 件法による回答が求められた。

5 件法による回答は, すべて1～5 点に得点化されて集計された。

# 結 果

## 1. 日本における他者と異なる自己の諸特徴の認知と受容

### (1) 「好きなこと」の「相違の認知」

全体として, 他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順に並べると, 「勉強」(2.66) > 「運動」(2.56) > 「体」(2.49) > 「性格」(2.41) となった。

「好きなこと」の「相違の認知」についての平均得点を, 諸特徴別, 学年別, 性別に示したのが, 図1である。いずれについても中間値である3 点よりは低かったが, 相対的には, 男子では, 高校生が高く, 中学生が低いこと, 女子では, 中学生が高く, 小学生(特に「運動」と「性格」)が低いこと, が特徴的であった。

他者と異なる自己の諸特徴について, それぞれ別個に, 学年(3) × 性別(2)の2 要因の分散分析

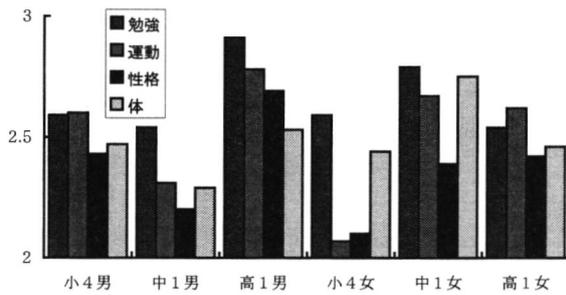


図1. 相違の認知 (好きなこと)

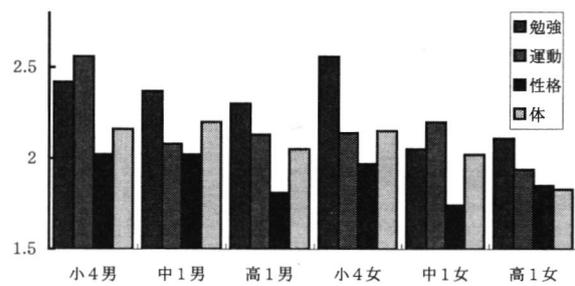


図2. 変身願望=受容の困難さ (好きなこと)

によって検討した。「勉強」の学年×性別の交互作用において統計的有意差 ( $F=3.94$ ,  $df=2,507$ ,  $P<.05$ ) が認められた。高校生では男子が高いのに対して、中学生では女子が高いことを反映していた。「運動」では、学年差 ( $F=4.70$ ,  $df=2,507$ ,  $P=.01$ ) と交互作用 ( $F=5.16$ ,  $df=2,507$ ,  $P<.01$ ) に有意差が見られた。すなわち、全体としては高校生の得点の高さが特徴的であった。しかし、性別との交互作用も有意であることから、性別を考慮に入れて解する必要がある。小学生においては男子が高いのに対して、中学生では女子が高いことが統計的にも認められた。「性格」では、学年差 ( $F=3.36$ ,  $df=2,507$ ,  $P<.05$ ) が示された。すなわち、高校生の得点が他の学年より高かった。交互作用は有意ではなかったが、女子では、小学生と中学生間で、男子では、中学生と高校生間で、それぞれ得点が上昇する様子も観察された。「体」では、学年×性別の交互作用に傾向 ( $F=2.32$ ,  $df=2,507$ ,  $P<.1$ ) が見られた。小学生や高校生では性差が見られないのに対して、中学生では女子>男子となっていた。

### (2) 「好きなこと」の「変身願望」=「受容の困難さ」

「変身願望」の得点は、必ずしも同一であるとは言えないが、「受容の困難さ」の指標とされた。したがって、ここでは、得点が高いほど相違の受容の困難さを示しているにとらえられた。全体として、他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順に並べると、「勉強」(2.28) > 「運動」(2.16) > 「体」(2.04) > 「性格」(1.89) となった。

図2は、「好きなこと」の「変身願望」=「受容の困難さ」についての平均得点を、諸特徴別、学年別、性別に示したものである。その多くが2.5点以下であった。「勉強」や「運動」が相対的に高いこと、男子では高校生の、女子では中学生の「性格」の得点が相対的に低いこと、女子において小学生の得点が相対的に高いなど、全般的に、学年の上昇とともに得点が低くなる様子が観察されることなど、が示された。

ここでも、他者と異なる自己の諸特徴について、それぞれ別個に、学年(3)×性別(2)の2要因の分散分析によって検討した。「勉強」において、学年差に傾向 ( $F=2.62$ ,  $df=2,507$ ,  $P<.1$ ) が見られ、小学生の得点が、中学生や高校生の得点よりも高かった。「運動」でも、学年差に傾向 ( $F=2.59$ ,  $df=2,507$ ,  $P<.1$ ) が見られ、ここでも、小学生の得点が、中学生や高校生の得点よりも高かった。「体」や「性格」には、統計的には有意差も傾向も見られなかった。

### (3) 「嫌いなこと」の「相違の認知」

全体として、他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順から並べると、「体」(2.79) > 「運動」(2.76) > 「勉強」(2.64) > 「性格」(2.54) となった。

「嫌いなこと」の「相違の認知」についての平均得点を、諸特徴別、学年別、性別に示した

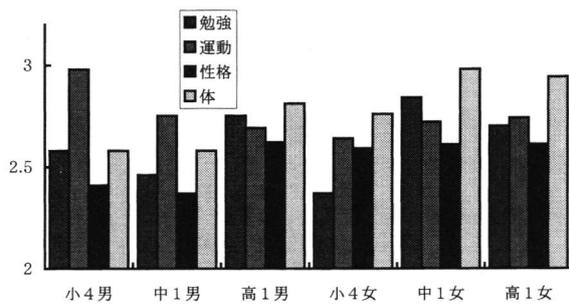


図3. 相違の認知 (嫌いなこと)

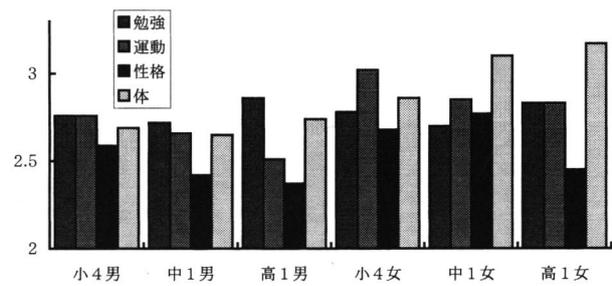


図4. 変身願望=受容の困難さ (嫌いなこと)

のが、図3である。いずれも3点を下回ったが、全体としては、高学年になっても得点が低下しないで上昇する様子さえ観察された。女子における全体を通じての「体」の得点の相対的高さ、男子における小・中学生の「運動」の得点の相対的高さも印象的であった。

他者と異なる自己の諸特徴について、それぞれ別個に、学年(3)×性別(2)の2要因の分散分析によって検討した。「体」について、性差が有意 ( $F=4.71$ ,  $df=1,507$ ,  $P<.05$ ) で、女子の得点が男子より高かった。学年が上がるにつれて得点も上がる様子は観察されたが、学年差も交互作用も有意ではなかった。「勉強」, 「運動」, 及び「性格」については、学年差、性差、及び交互作用のいずれについても、統計的な有意差や傾向が認められなかった。

#### (4) 「嫌いなこと」の「変身願望」=「受容の困難さ」

全体として、他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順から並べると、「体」(2.88) > 「勉強」(2.79) > 「運動」(2.75) > 「性格」(2.52) となった。

図4は、「嫌いなこと」の「変身願望」=「受容の困難さ」についての平均得点を、諸特徴別、学年別、性別に示したものである。中・高校生女子の「体」の得点や小学生女子の「運動」の得点が3点を超えるなど、全体として、男子よりも女子の得点が高い様子が観察された。女子においては、学年とともに「体」の得点が高くなること、相対的に「性格」の得点が低いことなど、が特徴的であった。

ここでも、他者と異なる自己の諸特徴について、それぞれ別個に、学年(3)×性別(2)の2要因の分散分析によって検討した。「運動」について、性差が有意 ( $F=4.52$ ,  $df=1,507$ ,  $P<.05$ ) で、女子の得点が男子より高かった。学年差や交互作用は有意でなかった。「体」についても、性差が有意 ( $F=7.54$ ,  $df=1,507$ ,  $P<.01$ ) で、女子の得点が男子よりかなり高かった。ここでも、学年差や交互作用は認められなかった。「勉強」と「性格」については、学年差、性差、及び交互作用のいずれについても有意差は見られなかった。

#### (5) 他者と異なる自己の諸特徴の相対的位置の学年差

「好きなこと」では、「相違の認知」と「変身願望」=「受容の困難さ」の両者とも、いずれの学年においても、「勉強」が高く、「性格」が低かった。高校生の「体」も、「相違の認知」に限らず、「変身願望」=「受容の困難さ」についても相対的に高いとは言えなかった。「運動」も中間にあったが、高校生においては、「勉強」に次ぐ位置にあった。

「嫌いなこと」では、「相違の認知」と「変身願望」=「受容の困難さ」の両者とも、いずれの学年においても、「性格」が低いのは共通していた。しかし、学年差も大きく、小学生において「運動」が高いのに対して、中学生や高校生においては「体」が高かった。「勉強」は中間にあり、高校生においては、「体」に次ぐ位置にあった。

## (6) 他者と異なる自己の諸特徴の相対的位置の性差

「好きなこと」では、男女とも、「相違の認知」と「変身願望」＝「受容の困難さ」のいずれについても、「勉強」が高く、「性格」が低かった。男子においては、「体」も低く、「運動」が「勉強」に次ぐ位置にあった。女子においては、「体」と「運動」は中間的位置にあった。

「嫌いなこと」では、男女とも、「相違の認知」と「変身願望」＝「受容の困難さ」のいずれについても、「性格」が低いのは共通していた。しかし、男子において、「相違の認知」で「運動」が、「変身願望」＝「受容の困難さ」で「勉強」が、それぞれ高いのに対して、女子においては、「相違の認知」と「変身願望」＝「受容の困難さ」のいずれについても、「体」が高かった。これらに次ぐのは、男子では「体」、女子では「運動」であった。

## (7) 学校生活の楽しさと他者と異なる自己の諸特徴の認知と受容との関連

全体として、学校生活の楽しさを従属変数とする重回帰分析をしたところ、公的自己意識は、これに貢献していたが、「相違の認知」と「変身願望」＝「受容の困難さ」の各測度については、「体」の「嫌いなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」の測度のみが負の関係を持つに留まった。

なお、学校生活の楽しさは、学年差 ( $F=7.11$ ,  $df=2,501$ ,  $P<.01$ ) と性差 ( $F=4.83$ ,  $df=1,501$ ,  $P<.05$ ) が有意であり、学年が低いほど得点が高く、男子より女子の得点が高かった。また、公的自己意識は、性差 ( $F=33.74$ ,  $df=1,499$ ,  $P<.01$ ) が有意であり、学年差 ( $F=2.51$ ,  $df=2,499$ ,  $P<.1$ ) には傾向が認められた。すなわち、女子>男子であり、学年が高いほど高いという傾向があった。

## 2. 中国における他者と異なる自己の諸特徴の認知と受容

## (1) 「好きなこと」の「相違の認知」

全体として、他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順に並べると、「性格」(2.51) > 「勉強」(2.40) > 「体」(2.39) > 「運動」(2.34) となった。

「好きなこと」の「相違の認知」についての平均得点を、諸特徴別、学年別、性別に示したのが、図5である。全体として男子が高いこと、高校生において「性格」の得点が高いこと、中学生女子の「体」の得点が相対的に低いことが注目された。

ここでも、他者と異なる自己の諸特徴について、各特徴別に、学年×性別の2要因の分散分析によって検討を進めた。「勉強」については、性差 ( $F=5.74$ ,  $df=1,234$ ,  $P<.05$ ) が有意であり、男子の得点が女子より高かった。学年差や交互作用には相違が認められなかった。「体」については、性差 ( $F=3.80$ ,  $df=1,234$ ,  $P<.1$ ) に傾向があり、男子の得点が女子より高かった。学年差や交互作用には相違が認められなかった。また、「性格」と「運動」には、いずれの有意差や交互作用も認められなかった。

## (2) 「好きなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」

全体として、他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順に並べると、「運動」(2.00) > 「勉強」(1.91) > 「体」(1.88) > 「性格」(1.85) となった。いずれも、2点以下であり、かなり低い得点である。

図6は、「好きなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」についての平均得点を、諸特徴別、学年別、性別に示したものである。男子の得点が女子の得点より高いこと、男女双方において、学年とともに得点が低下することなどが印象的である。

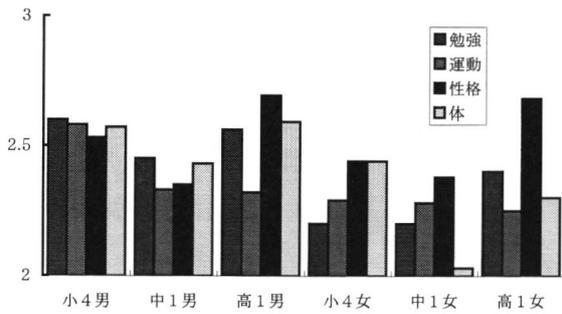


図5. 相違の認知 (好きなこと)

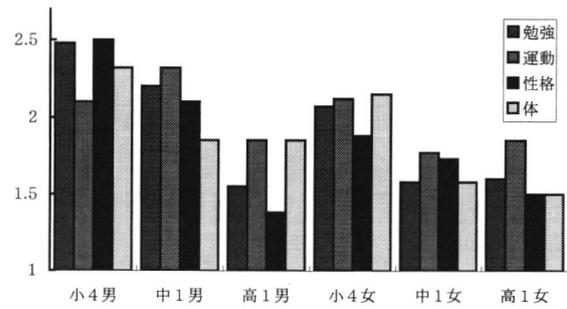


図6. 変身願望=受容の困難さ (好きなこと)

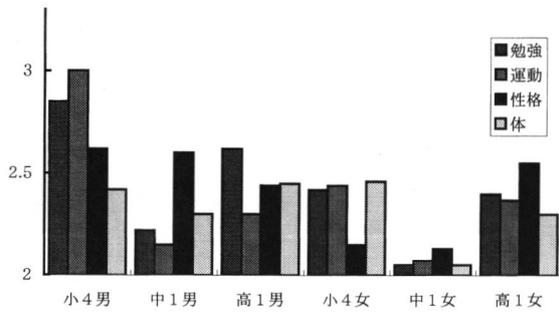


図7. 相違の認知 (嫌いなこと)

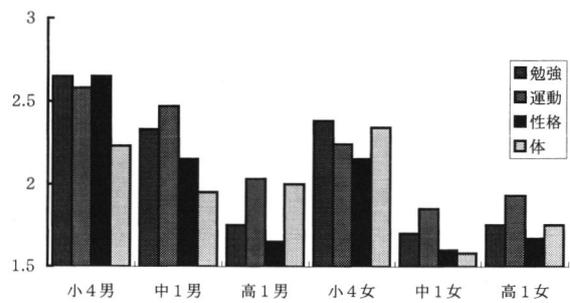


図8. 変身願望=受容の困難さ (嫌いなこと)

他者と異なる自己の諸特徴について、各特徴別に、学年×性別の2要因の分散分析によって検討を進めた。「勉強」については、学年差 ( $F=8.27, df=1, 235, P<.01$ ) にも、性差 ( $F=5.36, df=1, 235, P<.05$ ) にも有意差が認められた。すなわち、学年が高くなるほど得点が低くなり、男子の得点が女子の得点より高いことが示された。「性格」についても、全く同様に、学年差 ( $F=10.16, df=1, 235, P<.01$ ) と性差 ( $F=4.52, df=1, 235, P<.05$ ) に有意差があり、学年が高くなるほど得点が低くなり、男子の得点が女子の得点より高いことが示された。「体」については、学年差 ( $F=6.14, df=1, 235, P<.01$ ) に有意差が、性差 ( $F=3.33, df=1, 235, P<.1$ ) に傾向が示された。すなわち、小学生の得点が中・高校生より高く、男子の得点が女子より高かった。「運動」については、いずれの有意差や傾向も認められなかった。

### (3) 「嫌いなこと」の「相違の認知」

全体として、他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順から並べると、「勉強」(2.43) > 「性格」(2.41) > 「運動」(2.39) > 「体」(2.33) となり、諸特徴間の相違が明確でなかった。

「嫌いなこと」の「相違の認知」についての平均得点を、諸特徴別、学年別、性別に示したのが、図7である。いずれも2.5点の周辺に集まっている。やや小学生男子の得点が高く、中学生女子の得点が低いことがわかる。

他者と異なる自己の諸特徴について、それぞれ別個に、学年(3)×性別(2)の2要因の分散分析によって検討した。「勉強」については、学年差 ( $F=5.59, df=2, 233, P<.01$ ) にも、性差 ( $F=4.59, df=1, 233, P<.05$ ) にも、有意差が認められた。すなわち、学年差は、小学生と高校生の得点が中学生の得点より高いことを示しており、性差は、男子の得点が女子より高いことを示していた。交互作用には、有意差も傾向も認められなかった。「運動」については、

学年差 ( $F=6.97$ ,  $df=2, 235$ ,  $P<.01$ ) のみが有意であり、小学生の得点の中・高校生の得点よりも高かった。性差と交互作用には統計的相違が認められなかった。「性格」については、性差 ( $F=4.24$ ,  $df=1, 234$ ,  $P<.05$ ) に有意差が見られ、男子>女子であった。ただし、高校生女子の得点は男子以上に高かった。しかし、学年差と交互作用は有意ではなかった。「体」については、いずれにも統計的な相違は示されなかった。

(4) 「嫌いなこと」の「変身願望」 = 「受容の困難さ」

全体として、他者と異なる自己の諸特徴を得点の高い順から並べると、「運動」(2.18) > 「勉強」(2.10) > 「性格」(1.98) = 「体」(1.98) となった。いずれについても、得点がかたがり低く、また、諸特徴間の相違も顕著でなかった。

図8は、「嫌いなこと」の「変身願望」 = 「受容の困難さ」についての平均得点を、諸特徴別、学年別、性別に示したものである。全体的に低い得点であるが、小学生から高校生になるにつれて、得点が低下していること、男子の得点が女子の得点よりも高いことなどが注目される。

他者と異なる自己の諸特徴別に、学年×性別の2要因の分散分析によって検討した。「勉強」については、学年差 ( $F=9.71$ ,  $df=2, 234$ ,  $P<.01$ ) にも、性差 ( $F=3.94$ ,  $df=1, 234$ ,  $P<.05$ ) にも、有意差が認められた。すなわち、学年が高くなるほど得点が低下し、男子の得点が女子より高かった。高校生では性別による相違は認められなかったが、交互作用は有意でなかった。「運動」については、性差 ( $F=5.58$ ,  $df=1, 235$ ,  $P<.05$ ) に有意差が認められた。すなわち、男子が高く、女子が低かった。また、学年差 ( $F=2.86$ ,  $df=2, 235$ ,  $P<.1$ ) に傾向が認められ、学年が高くなるにつれて得点が低下する傾向があった。交互作用には有意差が認められなかった。「性格」については、学年差 ( $F=10.97$ ,  $df=2, 235$ ,  $P<.01$ ) にも、性差 ( $F=6.77$ ,  $df=1, 235$ ,  $P=.01$ ) にも、有意差が認められた。すなわち、ここでも、学年が高くなるほど得点が低下し、男子の得点が女子の得点よりも高かった。交互作用は有意でなかった。「体」については、学年差 ( $F=5.59$ ,  $df=2, 234$ ,  $P<.01$ ) にのみ有意差が認められ、小学生の得点が高く、中・高校生の得点が低いことが示された。中・高校生において、男子の得点が女子の得点より高い様子も観察されたが、性差も交互作用も統計的には有意でなかった。

(5) 他者と異なる自己の諸特徴の相対的位置の学年差

他者と異なる自己の諸特徴の間に、大きな相違が認められないこともあり、単純な一つの方向性を示すことはできなかった。

「好きなこと」について言えば、「相違の認知」においては、小学生で、「体」>「性格」>「運動」>「勉強」の順に、中学生で、「性格」>「勉強」>「運動」>「体」の順に、高校生で、「性格」>「勉強」>「体」>「運動」の順に、それぞれ得点が高かった。中・高校生で「性格」や「勉強」の相対的位置が高くなり、「体」の相対的位置が低くなると言えるかもしれない。「変身願望」 = 「受容の困難さ」においては、小学生で、「勉強」>「体」>「性格」>「運動」の順に、中学生で、「運動」>「性格」>「勉強」>「体」の順に、高校生で、「運動」>「体」>「勉強」>「性格」の順に、それぞれ得点が高かった。全体として得点が低く、諸特徴間の相違も顕著でないため、方向性を引き出すのは慎重でなければならないが、中・高校生で「運動」の位置が高くなり、「勉強」の位置が低くなる様子も見られる。

「嫌いなこと」については、「相違の認知」において、小学生で、「運動」>「勉強」>

「体」>「性格」の順に、中学生で、「性格」>「体」>「勉強」>「運動」の順に、高校生で、「勉強」>「性格」>「体」>「運動」の順に、それぞれ得点が高かった。中・高校生で「性格」の相対的な位置が高くなり、「運動」の相対的な位置が低くなっていた。「変身願望」＝「受容の困難さ」においては、小学生で、「勉強」>「運動」>「性格」>「体」の順に、中学生で、「運動」>「勉強」>「性格」>「体」の順に、高校生で、「運動」>「体」>「勉強」>「性格」の順に、それぞれ得点が高かった。全体を通して「運動」の相対的位置の高いこと、学年とともに「勉強」の位置が低下することなどが特徴的であった。

#### (6) 他者と異なる自己の諸特徴の相対的位置の性差

他者と異なる自己の諸特徴の各得点間の相違は非常に小さく、相対的位置自体安定的なものではないが、参考までに検討した。

「好きなこと」の「相違の認知」において、男子では、「勉強」・「体」・「性格」>「運動」であり、女子では、「性格」>「運動」・「勉強」＝「体」であった。共通して、「性格」の位置が高く、「運動」の位置が低いとも言える。また、「勉強」と「体」は、男子>女子とも言える。「好きなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」において、男子では、「運動」・「勉強」>「体」・「性格」であり、女子では、「運動」>「勉強」・「体」・「性格」であった。共通して、「運動」が高く、「体」と「性格」が低かった。「勉強」には性によって相違があり、男子>女子であった。

「嫌いなこと」の「相違の認知」において、男子では、「勉強」・「性格」>「運動」>「体」の順であり、女子では、4つの特徴がほぼ同じ得点であった。「嫌いなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」において、男子では、「運動」>「勉強」>「性格」>「体」の順に得点が高く、女子では、「運動」>「勉強」>「体」>「性格」の順に得点が高かった。共通して、「運動」や「勉強」が高く、「性格」や「体」が低いと言えるかもしれない。

#### (7) 学校生活の楽しさと他者と異なる自己の諸特徴の認知と受容との関連

全体として、学校生活の楽しさを従属変数とする重回帰分析をしたところ、公的自己意識は、これに貢献していたが、「相違の認知」と「変身願望」＝「受容の困難さ」の各測度については、「体」の「嫌いなこと」の「相違の認知」の測度のみが有意な関連を持つに留まった。「性格」の「嫌いなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」の測度には傾向が認められた。

なお、学校生活の楽しさは、学年差 ( $F=10.16$ ,  $df=2, 230$ ,  $P<.01$ ) が有意であり、学年が上になるとともに得点が低くなることが示された。女子の得点が男子より多少高かったが、性差や交互作用には有意差は示されなかった。また、公的自己意識は、高校生の得点が多少高く、女子の得点が男子より多少高かったが、学年差と性差および交互作用は有意ではなく、傾向も認められなかった。

### 3. 日本と中国の資料の比較

#### (1) 「好きなこと」の「相違の認知」

図1に示されるように、日本では、男子において、中学生の得点が低く、高校生の得点が高い。女子においては、小学生の得点が低く、中学生の得点が高い。これに対して、図5に示されるように、中国では、男子において、中学生の得点が相対的に低いのは共通していたが、女子において、中学生の得点が低く、この点では日本の資料と対照的であった。

各特徴別には、次のような相違が見られた。

- 1) 全体として、日本では、「性格」の得点が最も低いのにに対して、中国では、「性格」の得点が最も高い（特に高校生において）ことが特徴的であった。
- 2) 日本では、「勉強」や「運動」が相対的に高いのにに対して、中国では、「勉強」はともかく、「運動」の位置が低い。
- 3) 日本では、「勉強」が男女に共通して高いが、中国では、男子において高く、女子においてはむしろ低いといえる。
- 4) 日本では、女子において、特に中学生で「体」が高いのにに対して、中国では、「体」は女子においてよりも男子において高い。

(2) 「好きなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」

図2と図6を比較すると、日本においては、小学生から高校生へかけての変化が大きいとは言えないが、中国においては、小学生から高校生へかけて、得点の低下が急であることがわかる。さらに、日本では性差が大きいとは言えないが、中国では性差が大きく、女子の得点が男子よりかなり低いことが示されている。

各特徴別には、次のような内容が示された。

- 1) 日本では、一貫して「勉強」の得点が高いが、中国では、相対的には高く、小学生や中学生男子においては高いものの、その他では、必ずしも高いとは言えなかった。
- 2) 「性格」について、日本では、一貫して得点が低かったのにに対して、中国では、学年が上がるにつれて得点が低下していった。また、日本では、性差が顕著には見られなかったのにに対して、中国では、性差があり、高校生を除いて、男子>女子であった。
- 3) 「体」については、日本では、つねに一定の得点を示していたが、中国では、一定せず、たとえば、女子において、小学生では最も高いが、中・高校生では最も低いなどといった結果が示された。
- 4) 「運動」については、中国の小学生男子や日本の中学生男子は例外として、日本と中国に共通して、相対的に高い得点が示された。

(3) 「嫌いなこと」の「相違の認知」

図3と図7を比較すると、日本では、学年による相違が明確ではなく、しいて言えば、学年とともに得点が上昇する様子も観察される一方、中国では、小学生と高校生において高く、中学生において低いことが示された。また、性差に関しては、日本では、全体として、女子の得点が高い、あるいは、性差は認められないという結果であったが、中国では、性差があり、とりわけ小・中学生において、男子の得点が女子より高いことが示された。

各特徴別には、次のような相違が認められた。

- 1) 日本では、とりわけ女子において、「体」の得点が高いのにに対して、中国では、あまり特徴的でなかったが、平均点では最も低い得点であった。また、日本では、女子>男子であったが、中国では、性差も認められなかった。
- 2) 全体として、日本では、「性格」の得点が最も低かったのにに対して、中国では、小学生女子で低いものの、中学生や高校生女子で最も高くなるなど、日本の傾向とは明らかに異なっていた。
- 3) 「勉強」については、日本では、小学生女子で低く、高校生男子や中学生女子で相対的に高いとも言えるが、必ずしも明瞭な特徴が認められなかった。一方、中国では、中学生を除き、「勉強」の得点が相対的に高かった。中国では、性差もあり、男子の得点が女子よ

りも高かった。

- 4) 「運動」については、日本と中国に共通して、小学生男子の得点が高いと言える。日本では、中学生男子においても高かったが、中国では、逆に中学生男子の得点は低かった。その他の特徴的な変化は認められなかった。

(4) 「嫌いなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」

図4と図8に示されるように、日本では、学年進行に伴う明確な変化が認められなかったが、中国では、学年が高くなるに伴って、明瞭な得点の低下が認められた。また、中国では、男子の得点の方が女子よりも高かったが、日本においては、むしろ女子の得点の方が男子より高い様子さえ窺われた。

各特徴別には、次のような相違が認められた。

- 1) 日本では、「体」の得点が最も高かったのに対して、中国では、「体」の得点は相対的に低かった。とくに、日本では、女子において、学年上昇とともに得点が高くなり、中・高校生の得点がかかなり高かったのとは対照的に、中国では、逆に、学年上昇とともに得点が低くなっていた。また、日本では、性差もあり、女子>男子であったが、中国では、性差はなく、小学生を別にして、中・高校生では、むしろ男子の方が女子より高いという様子も見られた。
- 2) 日本では、全体を通して、「性格」の得点が最も低かった。中国でも、小学生男子を除いて、相対的に低い得点が示された。ただし、日本では、学年差や性差が認められなかったのに対して、中国では、学年とともに得点が低下し、男子の得点が女子より高かった。
- 3) 「勉強」については、日本では、学年進行による得点の変化や性差がほとんど見られなかったのとは対照的に、中国では、学年進行による得点の低下が明瞭に示され、また、性差もあり、高校生を別として、男子>女子であった。日本では、性差が認められなかったものの、男子において、一貫して、「勉強」の得点が相対的に高かったことも注目された。
- 4) 「運動」については、日本では、性差が示され、女子>男子であったのとは対照的に、中国でも、性差が認められたが、男子>女子であった。また、日本においては、学年による相違が認められなかったが、中国では、学年が高くなるにつれて得点が低くなる傾向が見られた。

(5) 学年別、性別、認知と受容別、特徴別にみた日本と中国の得点の相違

表1と表2は、学年別、性別、「相違の認知」と「変身願望」＝「受容の困難さ」別、特徴別に、日本と中国の得点について、両者間でt検定を行い、有意差の認められたものを、「好きなこと」と「嫌いなこと」に分けて示したものである。

表からわかることは、まず第1に、有意差の認められたものについては、あらゆる測度において、例外なく、日本の得点が、中国の得点よりも高かったということである。第2には、日本と中国間の有意差は、「好きなこと」よりも、「嫌いなこと」において、なかでも、「相違の認知」よりも、「変身願望」＝「受容の困難さ」において、顕著に認められたということである。第3には、小学生よりも、中学生や高校生において、有意差が認められることが多かったということである。そして、第4には、「嫌いなこと」の「相違の認知」及び「変身願望」＝「受容の困難さ」について、とりわけ「変身願望」＝「受容の困難さ」については、男子よりも女子において、より高い有意水準で有意差が認められることが多かったということである。ちなみに、女子における「嫌いなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」の得点の日本と中

表1 「好きなこと」における回答の日本と中国の平均得点の相違

	相 違 の 認 知				変身願望=受容の困難さ			
	勉 強	運 動	性 格	体	勉 強	運 動	性 格	体
小 4								
中 1	*				+			*
高 1		*			***		**	
男 子					+			
女 子	**			+	**			
全 体	**	*			**			

注1) \*\*\*は、 $P < .001$ ，\*\*は、 $P < .01$ ，\*は、 $P < .05$ ，+は、 $P < .1$ を示している。

注2) 統計的有意差のある場合は、すべて、日本>中国であった。

表2 「嫌いなこと」における回答の日本と中国の平均得点の相違

	相 違 の 認 知				変身願望=受容の困難さ			
	勉 強	運 動	性 格	体	勉 強	運 動	性 格	体
小 4						*		*
中 1	**	***		**	**	**	***	***
高 1		*		**	***	***	***	***
男 子		*		*	**		*	***
女 子	**	**	*	***	***	***	***	***
全 体	*	***		***	***	***	***	***

注1) \*\*\*は、 $P < .001$ ，\*\*は、 $P < .01$ ，\*は、 $P < .05$ ，+は、 $P < .1$ を示している。

注2) 統計的有意差のある場合は、すべて、日本>中国であった。

国の相違は、いずれも0.1%水準で認められた。

各特徴別には、どのような相違が有意であったであろうか。

- 1) 「好きなこと」の「相違の認知」：特徴的なことは、「性格」については、すべてに有意差が認められず、「体」についても、女子において傾向が認められるにとどまったということである。「勉強」については、中学生、女子、及び全体において、「運動」については、高校生と全体において、それぞれ有意差が認められた。
- 2) 「好きなこと」の「変身願望」=「受容の困難さ」：「勉強」について、傾向を含めるならば、小学生を除くすべての区分において統計的な相違が認められた。一方、「運動」については、すべてに有意差も傾向も認められなかった。また、「性格」については高校生で、「体」については中学生で、それぞれ有意差が認められるにとどまった。
- 3) 「嫌いなこと」の「相違の認知」：「体」及び「運動」については、小学生を除くすべての区分で有意差が認められた。その一方で、「性格」については、女子において有意差が認められたただけであった。また、「勉強」については、中学生、女子、及び全体で有意差が示された。
- 4) 「嫌いなこと」の「変身願望」=「受容の困難さ」：小学生における「勉強」と「性格」、及び男子における「運動」以外の区分において、すべてに有意差が認められた。とくに「体」については、例外なく有意差が認められ、小学生の5%水準を除けば、他はすべて0.1%水準での有意差であった

## 今後の研究課題

この研究は、他に参照すべき文献がほとんどない、他者と異なる自己の諸特徴の認知と受容に関して行われた、比較文化的発達的研究であった。したがって、探索的に今後の研究方向を探求するという側面を強く持っている。この点を考慮して、ここでは正統的に討論を展開するのではなく、いくつかの最も特徴的な日本と中国の資料における相違、あるいは日本の資料の特質を取り上げて、次の研究展開への手がかりを整理することにとどめる。

調査に際して、われわれの調査項目において、次のような内容をとらえることができるのではないかと仮定されていた。すなわち、「相違の認知」は、相違を意識化している程度を現しており、「好きなこと」の「相違の認知」は、近い将来に達成を期待する標的になっている程度を示しており、その「変身願望」＝「受容の困難さ」は、文字通りの変身願望であり、向上への意欲の表現として読み取ることができる。一方、「嫌いなこと」の「相違の認知」は、標的というより「気にしている」程度を現していると想定され、その「変身願望」＝「受容の困難さ」は、変身願望以上に、受容が困難であること、すなわち、その人が抱えている困難さとして読み取ることができる。

なお、われわれは、当初「嫌いなこと」の「変身願望」＝「受容の困難さ」のみを調査の内容として取り上げる予定であったが、調査への導入という面ばかりでなく、「暗い」側面だけの調査が与える、調査への参加者に対する負の影響という面から考えて、「好きなこと」、及び「相違の認知」を含む調査を実施することにした。

### 1. 中国の子どもと比較すると、日本の子どもは、他者と異なる自己の諸特徴の受容が困難である

この研究で収集された多様な資料は、小学生は別にすると、中学生や高校生については、いずれもが例外なく、日本の子どもの受容の困難さを反映していると考えられるものであった。もちろん、質問紙という形式による調査の回答では、日本の子どもは、このような回答をするという地点から解することもできる。しかし、小学生においては、必ずしも一義的に受容が困難であるとの回答ばかりではなかったことにも留意する必要がある。

人間の異質性への寛容のもう一つの側面として、われわれが従来検討を加えてきた、自己と異なる他者の諸特徴の受容に関する資料とは、全く逆の結果であった。そこでは、諸種の資料、たとえば、暴力を振るう友人などの否定的な他者の諸特徴を含めて、どのような他者の諸特徴を取り上げても、日本の子どもは、米国や中国の子どもに比べて、その特徴を受容することがより容易であるという資料が得られたのである。すなわち、日本の子どもとは対照的に、中国の子どもは、自己と異なる他者の諸特徴の受容において、最も困難であることが示されたのである。

自己とは異なる他者の諸特徴の受容は容易であり、その一方で、他者と異なる自己の諸特徴の受容は困難であるという、表面的には正反対とも見える日本の子どもの回答を、統合的に説明し得る機構を明らかにすることが求められている。

### 2. 中国では、学年が上がるにつれて、自己の諸特徴の受容が次第に容易になるのとは対照的に、日本では、学年が上がっても、自己の諸特徴の受容が容易にならない

中国の子どもにおいて、小学生から高校生になるにつれて、他者とは異なる自己の諸特徴の

受容がより容易になるということは、長ずるにしたがって、次第に、自己を責めることなく、ありのままの自己の諸特徴を受け入れることができるようになることを示していると解することができる。すなわち、気持ちを楽にして生きることができるようになった証とも、伸びやかに生きる基盤を育てている姿としても解することが可能なのである。もちろん、受容するということを、向上への意欲や変身願望を捨てて、自己に見切りをつけて「あきらめる」ということを示していると解する方が妥当である場合があるのはいうまでもない。

しかし、もし、前者の解を採用するとすれば、日本の子どもは、年長になったとしても、自己の諸特徴を受け入れる余裕を持つことができず、いつまでも気持ちを張り詰めた息苦しい日々を過ごしていると言えるのである。

ここでも、従来行ってきた自己と異なる他者の諸特徴の受容に関する研究結果とは全く逆の結果が得られた。従来の研究では、日本の子どもは、年齢が高くなるにしたがって、他者の諸特徴、たとえそれが否定的な特徴であったにしても、の受容が次第に容易になっていくという結果が得られていた。他者は次第に受け入れるようになり、自己については相変わらず受け入れを拒否し続けるという対照的な結果を、どのような機構によって説明することができるだろうか。この解明も今後に残された課題である。

### **3. 中国では、女子より男子の方が、他者と異なる自己の諸特徴の受容が困難であるのに対して、日本では、男子より女子の方が、その受容が困難である**

性差についても、中国と日本では対照的な結果が得られた。すなわち、中国では、女子よりも男子の方が、自己の諸特徴の受容が困難であった。それとは逆に、それ程明確ではなかったけれども、日本では、男子よりも女子の方が、自己の諸特徴の受容が困難であった。男女共同参画社会が目指され、女性の意識の大きな変化が指摘されている今日ではあるが、これらは、従来型の説明枠組みである、同調や他者評価懸念、あるいは恥の文化などの視点から説明可能であるかもしれない。

また、従来行ってきた自己と異なる他者の諸特徴の受容に関する研究結果とも全く逆の結果が得られた。すなわち、そこでは、自己と異なる他者の諸特徴の受容は、男子よりも女子において、より容易であるという結果が示されている。ここでも、表面的には全く逆に見える現象を統合的に説明する枠組みが求められている。

### **4. 中国では、「体」の受容に関して、他の特徴の受容よりも容易であり、学年が上がるとともにより容易になり、むしろ男子より女子において容易であるのに対して、日本では、他の特徴以上に受容が困難であり、学年が上がるにつれてより困難になり、男子より女子においてより困難である**

他者と異なる自己の諸特徴の内容にまで踏み込んで、今後の研究課題を挙げるとすれば、多種多様な課題が取り上げられることになる。ここでは、一つに絞って、取り上げるとすれば、この研究において、最も典型的な特徴として注目されることになった、「体」の受容が最も適切であろうと考えられる。

上記の課題設定には、多少の誇張が含まれてはいるが、この機構の解明は、1から3までに述べてきた全ての研究課題の解明につながっている。

文 献

- Crystal, D. S., Watanabe, H., & Wu, C. 1997 Intolerance of human differences : A cross-cultural and developmental study of American, Japanese, and Chinese children. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 18, 149-167.
- Crystal, D. S., Watanabe, H., Weinfurt, K., & Wu, C. 1998 Concepts of human differences : A comparison of American, Japanese, and Chinese children and adolescents. *Developmental Psychology*, 34, 714-722.
- Crystal, D. S., Watanabe, H., & Chen, R. 1999 Children's reactions to physical disability : A cross-national and developmental study. *International Journal of Behavioral Development*, 23, 91-111.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 古市裕一 1997 小・中学生における学校生活の楽しさとその規定要因 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 248.
- 濱田直美・渡辺弘純 1999 児童における他者と相違する自己の諸特徴の受容 愛媛大学教育学部紀要第I部教育科学, 45, 41-60.
- 宮下一博 1999 青年の成長への歩み 心理科学研究会編 新かたりあう青年心理学 青木書店, 131-155.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy*. Houghton Mifflin. (友田不二男訳 1965 ロージャズ選書2 精神療法(9版) 岩崎書店)
- Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (ed.) *Psychology : A study of science. Vol.3*. McGraw-Hill. (伊東博編訳 島瀬稔他訳 1966 ロージャズ全集4 セラピー・パーソナリティ・対人関係の理論・サイコセラピーの過程 岩崎学術出版社)
- Suls, J., & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave : Comparison and self-evaluation across life-span. In Suls, J. (ed.) *Psychological perspective on the self. Vol.1*. Lawrence Erlbaum Associates, 97-125.
- 鑪幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社
- 渡辺弘純 1994 変わっている友人に対する児童生徒の反応に関する比較文化的研究 平成5年度科学研究費研究成果報告書
- Watanabe, H., Crystal, D. S., & Killen, M. 2000 Children's and adolescents' evaluations of peer group inclusion and exclusion in Japan and the United States. *Presented at the XVIth Biennial Meetings of International Society for the Study of Behavioral Development*.

資料1 他者と異なる自己の諸特徴の認知と受容 (調査内容)

人はみんな他の人とどこがちがっています。みなさんはたぶん、ときどき“私は友だちとどこがちがっている”とか、“友だちは私とこのようにちがっている”とか、考えたことがあるでしょう。あなたが、あなたと同じ学年の多くの友だちとどんなふうにちがっているかについて、次の質問に答えてください。

1 学校の勉強の中で、あなたが同じ学年の多くの友だちと比べてちがっていることを考えてください。その中で、あなたが好きなことを思い浮かべてください。

① 今、思い浮かべたことについて、あなたは、同じ学年の多くの友だちと、どのくらいちがっていると思いますか？

1 ..... 2 ..... 3 ..... 4 ..... 5  
ほとんどちがわない 少しちがっている いくらかちがっている かなりちがっている とてもちがっている

② あなたは、この点をどのくらい変えたいと思いますか？

1 ..... 2 ..... 3 ..... 4 ..... 5  
ぜんぜん変えたくない 少し変えたい いくらか変えたい かなり変えたい とても変えたい

2 もう一度、“学校の勉強”の中で、あなたが、同じ学年の多くの友だちと比べてちがっていることを考えてください。その中で、あなたがきらいなことを思い浮かべてください。

① 今、思い浮かべたことについて、あなたは、同じ学年の多くの友だちとどのくらいちがっていると思いますか？

1 ..... 2 ..... 3 ..... 4 ..... 5  
ほとんどちがわない 少しちがっている いくらかちがっている かなりちがっている とてもちがっている

② あなたは、この点をどのくらい変えたいと思いますか？

1 ..... 2 ..... 3 ..... 4 ..... 5  
ぜんぜん変えたくない 少し変えたい いくらか変えたい かなり変えたい とても変えたい

3 “運動能力や体力” (走る速さ・ボール運動・水泳・あく力など) の中で、あなたが、同じ学年の多くの友だちとちがっていることを考えてください。その中で、あなたが好きなことについて思い浮かべてください。

4 もう一度、“運動能力や体力” (走る速さ・ボール運動・水泳・あく力など) の中で、あなたが、同じ学年の多くの友だちとちがっていることを考えてください。その中で、あなたがきらいなことについて思い浮かべてください。

5 “性格” (明るい・やさしい・いじわる・まじめなど) の中で、あなたが、同じ学年の多くの友だちとちがっていることを考えてください。その中で、あなたが好きなことについて思い浮かべてください。

6 もう一度、“性格” (明るい・やさしい・いじわる・まじめなど) の中で、あなたが、同じ学年の多くの友だちとちがっていることを考えてください。その中で、あなたが、きらいなことについて思い浮かべてください。

7 “体の特徴” (身長・体重・顔・髪など) の中で、あなたが、同じ学年の多くの友だちとちがっていることを考えてください。その中で、あなたが好きなことについて思い浮かべてください。

8 もう一度、“体の特徴” (身長・体重・顔・髪など) の中で、あなたが、同じ学年の多くの友だちとちがっていることを考えてください。その中で、あなたがきらいなことについて思い浮かべてください。

資料2 公的自己意識 (1~7) 及び学校生活の楽しさの認知 (8~12) 調査項目

次の質問を読んで、自分に一番よくあてはまると思う数字に○をつけてください。  
【ぜんぜんあてはまらない】ときは1,  
【あまりあてはまらない】ときは2,  
【どちらともいえない】ときは3,  
【少しあてはまる】ときは4,  
【とてもよくあてはまる】ときは5に、1つだけまるをつけてください。  
どれが正しい答えというわけではありませんので、あなたが思った通りに答えてください。

〈練習〉

1 あいさつをよくしている。 ..... 1 ..... 2 ..... 3 ..... 4 ..... 5  
2 あしたのお天気を気にしている。 ... 1 ..... 2 ..... 3 ..... 4 ..... 5

2つの質問に、それぞれ1つだけ○をつけましたか？  
では、次のページの質問に答えてください。

質問	ぜんぜんあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	少しあてはまる	とてもよくあてはまる
1 自分が人にどう思われているかが気になる。 .....	1	2	3	4	5
2 人によい感じ (印象) をあたえたかどうかかが気がかりである。 .....	1	2	3	4	5
3 自分を人にどんなふうに見せるか気にしている。 .....	1	2	3	4	5
4 自分が人にどんなふうに見られているかが気になる。 .....	1	2	3	4	5
5 自分の外見をいつも気にしている。 .....	1	2	3	4	5
6 出かける前には必ず鏡を見る。 .....	1	2	3	4	5
7 自分の行動の仕方には気をつけている。 .....	1	2	3	4	5
8 いつまでもこの学校にいられたらよいのにと思う。 .....	1	2	3	4	5
9 少しくらい体のぐあいが悪くても、学校に行きたい。 .....	1	2	3	4	5
10 学校には楽しいことがたくさんある。 .....	1	2	3	4	5
11 学校がなければ、毎日つまらないと思う。 .....	1	2	3	4	5
12 病気で学校を休むと、それをした気分になる。 .....	1	2	3	4	5

★ 最後に、○のつけやすれやとばしたページがないか、もう一度たしかめてください。  
これで調査は終わりです。ご協力ありがとうございました。